



twitterで怪談2010

301話～400話

## short story301 「朽ちた空— 1 —」

---

朽ちた空。

雲一つ無く、只……灰色が果て無く広がる。

泣く事も忘れたものだから、雨も雪も降らない。

空が泣かないなら生きものも泣かない。

否……泣けない。

朽ちた生きもの達は、触れ合えばポロポロと互いが崩れ落ち……、

次第に大地も灰色に埋る。

## short story302 「欲望の花— 1 —」

---

人が養分となり花を咲かせ実を付ける花。

人は己の欲を叶える為、  
養分となる者、実を食らう者が現われる。

養分となる者は、死して花に己の記憶を託し、  
食らう者は花の記憶の欲望を叶え、欲望が成就すると己が唯一の力を手に入れる。

## short story303 「成仏屋— 1 —」

---

成仏屋をしている。

死に損なった俺は、言われるがままにこんな珍妙な商売をしているのだが……、

「おっさん！もう一回言ってくれるか？」

『は、はい。子供の頃からの夢で……これが叶うと成仏出来ると思うんです！』

洗濯機で回る事が夢で……。

## short story304 「耳鳴り— 1 —」

---

耳鳴りがする。

最初は、疲れているだけだと思っていた。

けれど気が付いた……、

疲労だけでこんなに色々な種類の音が聞こえるの？

私は……それに気付いてから、気配を感じるようになった。

それに慣れてから、

『等々、姿まで見えるんですね』

「！」

## short story305 「霊魂使い— 1 —」

---

花卉が舞う様に、  
水が踊る様に、  
私は、霊魂を操る。

何故……こんな芸当が受けるのか？

多額の金を払い、私のショウを見る為の客が来る。

帰り際に、客が数人居なくなっても、誰も咎める者は無い。  
そう霊魂は……只、在るだけではない！

『アハハッ』

何度も同じ夢を見た。

悪夢だ。

映画を観る様に、繰り返し同じ夢を見る事もあれば、続きを見る事もあった。

昨日……、

夢に出て来た男に会った。

夢で見たと同じに目が合う。

まただ……、

今日は、夢で見た女に会う。

目が合い、女が言う。

「やっと来たわね」

始まり？

## short story307 「噂のトンネル— 1 —」

---

噂のトンネルに行った。

前を走る車に目をやると、  
車の天井に、婆（ばばあ）が乗っている！  
婆は、窓という窓に手形のようなものを付けている……。

トンネルを抜けると、

「うわっ！」

婆が俺の車のフロントガラスに当たり……、  
後ろへ吹き飛ばされて行った。



## short story308 「噂のトンネル—2—」

---

噂のトンネルに行った。

ふと横を見ると、爺（じじい）が車の横を疾走している！  
ギョ！とした俺に爺は『フン』と、鼻を鳴らし走り去る。

今度は前の車の横を走り……、

キキッ！

急ブレーキ！

俺は追突を回避！

トンネルを出ると、爺が鼻を鳴らした気がした。

## short story309 「噂のトンネル—3—」

---

噂のトンネルに行った。

「噂程でもないな」

と、思いながらあっさりとトンネルを抜けた。

赤信号で停止。

見ると……、

前の車には、

無数の手形が付き、そこから、ドクドクと血が流れ始めた！

「うわっ！」

気を落ち着け、発進。

後（のち）、

カーブに差し掛かる頃には、前の車は消えていた。

## short story310 「噂のトンネル—4—」

---

噂のトンネルに行った。

そこは、怨霊の影が壁に張り付き、不気味に蠢（うごめ）いていると言う。

俺は、オレンジ色の光や雰囲気呑まれ、  
中に入る事を躊躇した……。

「そうだ！音楽だ！」

大音量で進む……、

と……、

壁では、怨霊達のダンスが始ってしまった。

## short story311 「未来の地図— 1 —」

---

未来の地図を手に入れた。

そこには、私の住んでいる街に、空白があった。  
子供と一緒に落書きで空白を埋め、  
気が付くと、  
街を上塗りするように世界を作り上げていた。

私は仕事の為、単身米国へ……。

五年後、帰国。

街は、落書き通り創れていた。

## short story312 「乙女と墓— 1 —」

---

華やかな街並みを抜けると、  
そこには……、  
白百合が道の真ん中に在り、道案内をする様に列を成している。

一瞬の空白。

進む事を躊躇う。

俯くと、百合が哀しげに見え、先に進む。

百合の香がきつくなり、

やがて、  
そこは……、

乙女の彫刻が埋め尽くす墓だった。

## short story313 「在りし日を映す鏡— 1 —」

---

在りし日を映す鏡を購入。

私は、骨董屋の言い付けを守れずに、毎日……見続ける。

妻の姿。

母の姿。

初恋の相手やら、若き日の自分。

切りが無い。

最後の力で連絡をする……、

「程々にと……貴方の中身は鏡の中です、再起は不可能。鏡ごと回収します」

## short story314 「終末— 1 —」

---

見上げた空に在る星は、  
赤く染まっていた。

ゾクリとする終末を感じる。

未来を予言した預言者も、  
私の様に身震いしたのだろうか……、

終末が近づく。

もう一ヶ月も無い。

隕石群直撃後、  
この世界は……、

後何日、  
空を見上げる事が出来るのだろうか……。

## short story315 「海の王国— 1 —」

---

思い残す事は無いと飛び込んだ海。  
私の身体は沈んで行く。  
深く沈んで行く事が心地良い。

意識を手離し掛けた頃に、深淵から光を見た。

「あれが伝説の……」

海の王国。

私は、今、辿り着こうとしている。  
落ちて来る私を見る人々は……。

キャアアアア！



## short story316 「才能の実— 1 —」

---

才能の実を食す機会に有り付いたが……、

「副作用は無いのか？」

『御冗談でしょう？』

『そんな旨い話が、世の中にあるとでも？』

「……なんだ」

『そうですね、貴方の死後、貴方がこの実になるんです』

『実が、貴方の才能を喰うという事です』

## short story317 「蔵の妖怪— 1 —」

---

家の蔵に住まう妖怪。

年に一度の供物で、代々我が家を裕福にしてくれていたと言う。

その妖怪が死んだ。

寿命らしいが……。

多くの妖怪の参列で賑わい、  
妖怪独特の葬儀が行なわれた。

その後……、

妖怪による、  
蔵に新たに住う妖怪の選抜の宴は……、

人の想像を超えていた。

## short story318 「眼から生まれる影— 1 —」

---

眼から影が出て仕方が無い。

瞬きする度に、新しい影が生まれる。

影は、  
楕円や四角、輪郭の曖昧なもの、色々な形をして、  
不気味な感じは無いが……、

困った。

影で埋め尽くされていく部屋は、灯かりが足りない。

実態は無いが……、  
一体度すれば……、

困った。

## short story319 「午後のお茶の時間— 1 —」

---

午後のお茶の時間に、幽霊が訪ねて来る。

最初は、

追い出す事に必死だったが……、

部屋を追い出される幽霊の後ろ姿を見ていると、段々と居た堪れず……。

最近は、彼と一緒にお茶をする事が日課。

過労死した中年の彼は、

『午後のお茶が夢だった』と言う。

珍しい百合に魅かれ、

山に登り、

やっとの思いで手に入れた。

百合に手を伸ばすと……、

震えた気がした。

大切に掘り起こし、私の庭に植える。

百合は、数日で元気になり……、

その頃から、少女が現われる様になった。

透き通る肌は百合の様で……。

楽園の完成。

傍らに……、

女の幽霊が居る事を覗けば、  
普通の晩酌なのだが……、

『私が、見えるんですよ？』

無言を通すが……、

「か、顔を近づけるな」

しまった！

『フフッ、見えるんですね』

『今日からお世話になります！未練があって成仏出来ないもので』

「え……」

## short story322 「ずぶ濡れ女— 1 —」

---

ふらふらと、  
交差点の真ん中をずぶ濡れの女が歩く。

行き交う車は次々と追突し、

人も巻き込まれ周囲は大惨事。

女に向かって車が突っ込む！

が、

女をすり抜け大破！

「キャアアア」

一人が悲鳴を上げた。

連鎖する。

もう誰も止められない。

女は……………。

## short story323 「映画の世界— 1 —」

---

毎日、同じ映画を観続けた。

時間の大半をその映画に使う様になった。

が……、

不思議な事が起き始めた。

時間の感覚がずれている？

今日は、もう、五回も観たのに、20分位しか立っていない。

その内に……、

部屋から世界は、映画そのものに染まり始めた。



## short story324 「魔物の迎え— 1 —」

---

子供が、好き嫌いばかり言う。

「あんまり好き嫌いを言うと、そのテレビの中の魔物が向かえに来るよ」

と、脅かした。

大笑いした子供だが……、  
日に日に魔物の迎えを気にし出した。  
ある日、

「僕、行くよ」

と、言うと玄関に向かい……。

魔物を本物にしてしまった私。

睡眠中に夢を見ない。

いつからか……、  
目を閉じた闇の中で眠りに入り、  
闇から、朝、目覚める。

いつからか……、

現実の色のある世界が、  
夢に思えて来た。

人や街が夢の様で、  
そこでは望めば、  
何でも手に入る様な気がした。

闇はもう厭だ！

……………

夢も、買えるだろうか……………。

## short story326 「魔物— 1 —」

---

コツコツと響く足音。

噂通り……。

人や動物の気配すら無い所で、足音が響く。

最初は、足音だけだったが……、

誰かの悪戯か？

壁には血糊が見られる様になった。

更に……、

異臭や肉片が……、

悪戯も、此処まで来ると悪質だな、と、思った矢先……。

人を食らう魔物を見た。

## short story327 「廃屋— 1 —」

---

廃屋となった家に、かならずしも霊が住み着くとは言えないが、

『お父さんどうします？皆、期待してるんじゃ……』

『まあ世間では一家惨殺。犯人捕まらず。と言う事になってるしなあ……』

『いいじゃない？どうせ成仏出来ないだから、住もうよ』

## short story328 「雲と死体— 1 —」

---

うねり進み行く雲を見付け……、  
息を飲んだ。

錯覚だろう？  
帰路に意識を戻すが……、  
首筋から這い上がる様な……妙な気配。

振り返る。

雲が在り……、

うねり！  
色が変わる！  
絞りだす！

一瞬、止まった……。

肉片が、バラバラと落ち……、  
血と肉片と異臭に包まれた。

## short story329 「天の目— 1 —」

---

スクランブル交差点での出来事。

信号待ちをしていると、  
悲鳴があちらこちらからあがる！

皆、空を見上げながら……、

私も空を見た。

「！」

巨大な目が在り、見詰めている！

思わず悲鳴を上げる！

巨大な目は、瞬きをすると消え……、

血の雨が降り出した。

## short story330 「路地— 1 —」

---

見知らぬ所の、路地に迷い込んでしまった。

薄暗い……、

僕は辺りを見回すが、人の居る気配は無い。

「困ったな」

ドクッ！

予期せぬ心臓の高鳴り！

鳥肌が立つ！

僕は走り出す！

夢中で走りながら見た物は……、

壁の目、目！

走る！

路地が狭くなり……、

僕は！

鮮血を浴びる。

俺は、高揚し、  
後（のち）、  
その場に倒れ込む。

「赤鬼、まだ殺すのか？」

『ああ』

「何故だ」

『望め、学べ』

「は？」

『此処は地獄。お前が答えを見付けなければならない』

連続殺人犯の俺は、  
こやって毎日殺し続ける……。

何を？

厭だ……………。



## short story332 「コンプレックスー1ー」

---

男も女も頭に袋を被りふらふらと彷徨い歩くシュールな光景。

誰かが袋を取ると、塵と消える。

其の様は……、

頭、

顔、

体を、

其れ其れ腕で包み、苦悩に体をくねらせ消えるそれは妄執か？

「あれは何だ」

『コンプレックスを苦しんだ者の成れの果て』

## short story333 「足だけの幽霊— 1 —」

---

「怖い！」

この二、三日。

足だけの幽霊が、登校途中に後ろを着いて来る……。

スカートが覗くので、女の子だとは思いますが……、

余りに緊張するのか、

電車の中で意識を失っているらしく、

記憶は、朝の登校から始まる。

あの幽霊のせいだ……、

幽霊のせいだ！

## short story334 「足だけの幽霊—2—」

---

あの幽霊……。

私はある朝、  
ふと駅にある大きな鏡を見た。  
後ろに、例の幽霊が立って居る、

「え！」

「何よ……」

私の足じゃない！

制服から覗く足は私のもので……、

「思い出した！」

私……、

あの男に、突き落とされたんだ……。  
線路に落ちてぐちゃぐちゃに……。

『許さない！』

あの男！

見付けて復讐してやる！

———最近、  
駅で線路に飛び込む自殺が多発している。

まるで宙に浮き、  
飛ばされる様に、  
線路に落ちて行くと言う。

不思議なのは、  
若い男性が多いという事。

最近では、幽霊が出るなんて噂まである。

「俺は此処に居たいんだ！」

居たいんだ！

闇の中で蹲（うづくま）る。  
俺の頭の中にずぶりと手が入ってくる。

「やめてくれ！」

いや……、  
気持ちいいのかもしれない、この混沌が……。

俺を抱える腕がある。

冷たい。

「嫌だよ……」

ウワァアアア！

———例の患者、  
またか……………。

「ねえ」

そんなに罪な事なの？

私は産みたかったの！

けど、  
事故で……。

わざとじゃないわ。

「事故なのよお」

頭の中は、  
流産してしまった子供の事ばかり。

その子供は、  
目の前で、  
日に日に成長を遂げる。

「許せない！私が苦しんでいるのに」

身勝手な、私……………。

「どうして此処は、こんなに暗いの？」

私は、  
闇の中で、  
壁にぶつかりながら歩く。

「どうして……」  
「あの人は何！」

やめて、  
血塗れの手で触らないで！  
やめて、  
冷たい手で触らないで！

「助けて！」

あ……、  
そうか……、

此処、火事で……。

霊魂の私達は、彷徨う。

## short story339 「開かずの間— 1 —」

---

「婆ちゃん、ごめん！」

何時（いつ）頃まで、  
俺は、助けを呼んで謝ったのか……。

訳も聞いた。

婆ちゃんが子供の頃に、死んだ姉の病気のせいで開かずの間になった部屋。

入るなど……、

俺に触れる赤い手や白い手、青い手……。

——祖母が、

「和馬は、もう駄目だ」



## short story340 「化け物屋敷— 1 —」

---

「殺しあえと言ったよな？」

「ああ、そうだ」

俺達は、迷路の様な屋敷の中を走り、逃げ回っている！

俺達のようなクズ……。

金がいる！

ウワァアアア！

「まただ！」

無数の赤い手や白い手に捕まれ人間が、壁や廊下にズブズブと嵌（はま）る。

「クソォオオ！化け物屋敷が————」

## short story341 「闇を吐く— 1 —」

---

闇を啄ばむ鴉を見た。

まるでそこには馳走が有る様に目を光らせ丹念に啄ばむ。

呻き声が聞こえて来た。

鴉の啄ばむその辺りから……。

人の物だと思うが、人の姿が無い。

やがて、

鴉が飛び立つ。

後には、

無残に刺し殺され、口から闇を吐く死体があった。

## short story342 「肉体ごと精神や魂を燃やす者— 1 —」

---

最近の変化。

世の中に何が起きているのか？

肉体は燃えるが、精神や魂は、特定の者でなければ燃やす事は出来ない。

が……、

自ら、肉体ごと精神や魂を燃やす者が現われた！

これでは……、

人外の者は堪ったものではない！

一部の者は、餌不足に悩む日々……………。

## short story343 「人外の者の殺戮の始まり—1—」

---

鴉が空を埋め尽くす様に飛ぶ宵闇。

気付いた人間が、空を訝（いぶか）しげに見詰める。

『よう、鴉』

翼無き者が空に浮かび、鴉に話し掛ける。

『今日は宴でもあるのか？俺も連れて行け』

鴉は、眼をぎらつかせ方向を示す。

『あそこか』

人外の者の殺戮（さつりく）の始まり。

## short story344 「光の森— 1 —」

---

光が交差する森。

此処の木はすべて光。

通る者を貫く。

「貴方は、貫かれずに通れると思いますか？」

愚問。

心に闇の無い人間なぞいないのだから……………。

闇が在るから光が見える。

そんなものだから……………。

森は、  
獲物を待っている。

闇を貫く為に……………。

## short story345 「光の制裁— 1 —」

---

光の槍が天から降り……。

海も山も街も。  
生きとし生けるもの。  
全てを貫く。

強制的に制裁される。

為す術は無い。

光の槍は、  
大地に、  
海に、  
留まるもの有り。

闇の盾を持つ者しか光の槍が在る場所は通れない。

故に、  
真に闇を理解した者しか通れない。

## short story346 「貫く光— 1 —」

---

人を貫いた光が、オブジェの様に街並みに溶け込み時間が過ぎる。

時が偉大なのか……、

人が愚かなのか……、

刻まれたものは朽ち。

傷は癒える。

その様が滑稽にも映る。

が、

それこそが審理なのかもしれない。

———更に時を越えたなら、

人は何を見る？

## short story347 「闇に生首— 1 —」

---

夜の街を彷徨う。

闇は全てを隠すとても謂わんばかりに、生首が高さ1m程の塀の上に置いてある。  
血が滴り落ちる様（さま）を見ると、本物に見えるが……、

声も出ず俺が見入っていると、

『ちょっと、その首、人間除けですよ』

と、塀の向こうから声がした。



## short story348 「雪女— 1 —」

---

最終電車に乗り地元の駅に着く。

ホームの待合室に女が独り。

「どうぞ」

と、自販機で買った珈琲を渡す。

女も、

「ありがとう」

と、受け取り。

「私、恋を無くしました」

「ええ……私もです」

沈黙が心地良く降る雪を眺め……。

横を見ると、

女は溶けていた。

## short story349 「地獄からの手— 1 —」

---

最近、地獄が満員らしい。

「あっ、みつけた」

子供が楽しそうに、地面から生える手を踏み付ける。

手は、痛そうに震え消えるものもあれば、グチャと潰れるものもある。

手を引っ張ると……、

『すみませんね、ちと、この世を彷徨いますわ』

中年の男を地面から引き抜いてしまった。

## short story350 「死のダイブー1ー」

---

死のダイブが楽しめる場所があると言う。

ビルの谷間から下を覗くと、  
そこには、  
びっしり地面から手が生えていた。

ダイブの料金は、  
飛んだ後に手を一つ引っ張るだけ……。

俺もその恐怖を味わう事にした。

グチャ……、

俺は、手に嫌われていたらしい。

## short story351 「ビルの頂点— 1 —」

---

まだ……届かない。

私はすでに死んでいる事は分かっている。

過労死だった事も……、

そして無様にもこの世を彷徨っている。

まだ……届かない。

振り返ると自分には、

家族の心は私には無く、

私に残ったのは仕事。

只、あのビルの頂点が見たいんだ。

『行こう』

あれがあこの世のレール。

目指すは……。

目指すは！

『……………』

押し黙る。

混沌を進み行くと先に何があるのだろうか……。

陳腐に虚無があるとか？

我等が進み行くあの世のレール。

『行こう、行こう』

進む行くから見渡せるのだ。

あの世が……………。

墓の前に立つ。

僕は崩れ落ち跪き涙が溢れ……、

墓石から手がぬっと出る。

その手が僕の首を絞め……、

ハアハア……。

いつもここで目が覚める。

「何なんだ！」

今日も墓の夢を見て。

『ああ、僕が僕の首を……この世を彷徨っていたのか』

戻ろうか止めようか……………。

## short story354 「死体に群がる— 1 —」

---

散らばる肉片。

そこら中に噎せ返る血の匂いを撒き散らし。

空では鴉が獲物を狙い。

物陰では妖怪や餓鬼が涎を垂らし見詰めている。

わらわらと事故処理に集まる人間達を、どう、誑（たぶ）かし有り付いてやろうかと……。

見えぬ、人間どもはそ知らぬ顔。

## short story355 「魂が在ると知り— 1 —」

---

君の影が僕の影で僕のが影が君の影で……、  
そんな風に僕たちは寄り添い歩いて来た。

君が死ぬまでは……。

『ねえ、僕もあれから死んだんだよ』

あれからすぐに……、

けれど、

君を見付ける事は、今だ、出来ない。

自らの死で魂があると知ったんだけどね……………。



## short story356 「死の映画— 1 —」

---

死の映画を観た。

ひたすら人が死ぬだけの映画。

観客は恐ろしい程、

皆、

バラバラの反応をして、

その光景は滑稽にも映る程で……………。

俺は其れを見る方がリアルを感じた。

会場を出る時に、

男が俺を呼び止める。

『貴方も、自分の死を見ましたか？』

## short story357 「人類の残像— 1 —」

---

夕暮れ時に、  
手を繋ぎ、  
買い物をする親子を見て和む。

何度も何度も見たくて同じ時刻に足を運ぶ。

ウィルスにより、ほぼ死滅した人類。

皆、当ても無く彷徨うのが日常で……。

残像が、  
霊が、見える俺は、嘗（かつ）ての街並みを眼に映し彷徨う。

命が尽きるまで……………。

明け方に見る幽霊は、

そう……、

貴方を連れて行こうとしています。

どこへ？

勿論、

冥府へ。

誘う事を義務付けられた幽霊がいるのです。

その幽霊は、

そう……、

貴方の理想の形をしています。

気配を感じた時から虜となり……………。

ええ、逃れられません。

『Showtime！！』

『さあ！人ならざる者達よ！』

『此処にいる人間どもは、皆、我等が餌！』

『気にする事はない！喰らえ！喰らい尽くせ！』

『引き裂くものよし！魂を抜くのもよし！』

華麗に人間達を笑いに誘う妖魔のショウにて。

## short story360 「乙女の花— 1 —」

---

夢見る乙女は花になるのです。

其の花園に可憐に咲く乙女の花。

恋人達が戯（たわむ）れに訪れ、花を目で、愛を語り合います。

恋人達の幸福の笑みは、乙女達の花に……………。

嫉妬を芽生えさせ、

甘い香りが毒と変わる頃には、

恋人達は…………、

血と肉片の海になるのです。

## short story361 「霊魂使い—2—」

---

霊魂使いの私は、食事に困る事は無い。

食事は、向こうからやって来るのだから。

今日も花卉が舞う様に水が踊る様に、霊魂を客の前で操る。

酔い痴れる客達。

高揚して行く魂は、極上の香りを放ち……………。

ショウが終わっている事すら気付かない。

『クククッ』

## short story362 「噂のトンネル—5—」

---

噂のトンネルに行った。

女がトンネルの中で、ヒッチハイクをしている。

前の車が止まり女を拾う。

後部座席から見る女の後ろ姿は、黒髪が美しいもので……、  
俺の視線は女に釘付けとなる。

ふいに女が振り返った。

ヒッ！

飛び出た眼が俺を見据える。

## short story363 「噂のトンネル—6—」

---

噂のトンネルに行った。

男が四つん這いになり壁を徘徊している！

ヒッ！

流石に噂のトンネル！

俺達は、声も出ず、身体は硬直するしかなかった！

ふいに男がボンネットに飛び乗った！

パニック爆発！

男が手を前に進めると車を通り抜けて行った。



## short story364 「過疎化よる村興し—1—」

---

狂わされた人間が大通りを歩いて行く。

ゆっくりと……、  
見せ付け様に、

「ククッ」

「アハハッ」

その笑い声は、  
ゾッ！  
とする危機感と、ふざけた道化の様なものを感じる。

生贄か？  
等々、俺の番だ！

「如何にも狂った様ですよ！」

過疎化よる村興しらしいが……………。

## short story365 「過疎化よる村興し—2—」

---

村興しに狂人の振りて、酷くないか？  
と、尋ねると、

「いやね、廃屋はそのまま観光スポットになるし、最近では……」

ふざけてないか？と、思う俺を余所に、

「霊や妖怪ていうんですかね？勝手に住み着いてくれるんで出演料もただなんですよ！」

おい……………。

## short story366 「血しぶきの女— 1 —」

---

血しぶきを振り撒き、女が歩く。  
女の全身はまるで血のシャワーを浴びた様だ。  
女の瞳は妙に潤み血が滴る。

その女の視界に入り、  
女の血しぶきを浴びた者は、  
恍惚の表情を浮かべ……………。

何を見たのか！  
何を感じたのか！

進み行く女。

後には、異様な光景が残る。

## short story367 「雪と桜と雪女と— 1 —」

---

雪と一緒に舞う桜の花弁。

冬に、  
桜の花が咲く事に、  
花弁が舞う事に、  
不思議を感じなければいけないのだけれど……。

余りの美しさに、

「綺麗……」

ついて出た言葉はそれで。

桜の木の下に美しい女が独り。

視線が合う。

『私は、冬しか生きられないのです』

雪と桜の花弁舞う桜の木の下。

女が、

『あの人と約束をしました』

『この時代に寄り添えなくとも……』

『きっと……』

『未来の世界では寄り添えると……』

女の閨（うるう）瞳。

『あの人は……まだ、生まれ変わっては来ません』

『けれど、私は……』

『待つ事が幸福なのです』

雪と桜の花弁が、  
女を優しく包むように舞（まい）。

私は気付くと、

「寂しくは無いの？」

女に言葉を投げていて、

『寂しくはありません』

『貴女のように。待つ女の方が……私を見付けて下さいます事がありますから』

私は涙が込み上げ、

『それに…未来は…』

『それに……』

『未来は……』

『この雪の様に、真っ白です』

『貴女と待ち人の未来も……』

色白で美しい女の温かい言葉。

私は涙が止まらなくて……、

そんな私を包む様な雪と桜の花卉。

優しさが舞う中、

私を包み込む腕があり。

「遅くなってごめんね」

彼に包まれ……………。

「泣いているの？」

私の様子に戸惑う彼……、

「満開の桜と雪が切なくて……」

訳の分からない事を言う私。

「満開の桜？」

見上げると、

桜は、  
花どころか、葉一枚つけて居（お）らず……。

そして、あの美しい女も消えていた。

「大丈夫よ」

彼と手を繋ぎ、雪の中を進む。  
未来へ……………。